

事業実施報告書

団体名:NPO法人 こどもの木

事業名:発達障がい児とその親へ、“愛情ボランティア”による「はぐくみ相談会」

1 事業の目的

発達障がい児及びその家族の心情を理解し、より良い心理的状況に親子を導くような家族支援を行うことを目的とした。当該家族が孤立感を感じることなく安心感をもって育児を行っていくことができるように、専門的なアドバイスだけでなく、親子が安心していくことができるような愛情ある支援体制の形成に努めた。

2 事業内容

(1) 事業の概要

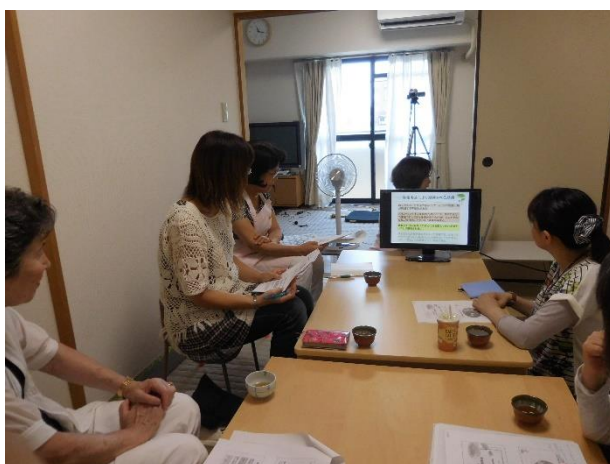
- ① 相談体制づくり；専門的な相談ができる子どもの発達専門の臨床心理士や言語聴覚士、相談員で相談活動を行った。
- ② ボランティア・利用者の募集；『発達障がい児の親の集い』などで呼びかけて、利用者を募った。また、相談会の広告を地元紙に載せることで、ボランティアと利用者を募集した。その他、相談会の趣旨についてのチラシを作成し、地域の保育園や障害児の相談支援事業所や通所支援事業所、市役所担当部署・保健センターに配布して協力を仰いだ。
- ③ 相談会の実施；親だけや子どもと親が共に相談を受けることができる相談会を実施した。相談会の場所には臨床心理士（または必要に応じて言語聴覚士）と相談員の二人が協力しながら対応した。臨床心理士や言語聴覚士が、当該親子のそれぞれの特性や個人的背景を踏まえて、1) 子どもの理解や対応の仕方、2) 親の気持ちへの対応などについて、相談員やボランティアに対して伝達していった。また、ボランティアマニュアルを作成し、ボランティアに対して説明会を実施した。

(2) 事業の流れ

- ・事業の流れについては別紙に記入する。
- ・相談会、会議、他機関連携については以下の通りである。相談会は当法人事務所で行った。

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
相談会実施回数	6	8	9	10	11	11	3	3	5	66
相談会利用者延べ人数	7	10	14	22	18	17	3	4	8	103
連携・協力機関数	1	4	1	3	0	0	4	0	0	13
会議実施回数	2	2	2	0	1	0	2	0	1	10
ボランティア参加延べ人数	3	11	6	7	8	5	1	1	1	43

・事業の様子



7/11 ボランティア説明会



相談会の様子（母と臨床心理士と相談員）



相談会（ボランティアと子ども）



相談会（ボランティアと母と相談員）

（3）連携・協力機関

所沢市自立支援協議会こども部会において、理解協力を求めるとともに、相談支援事業所や障害児通所支援事業所と協力をしながら行った。また、ボランティアについては、NPO法人ときめきライフ埼玉や所沢市社会福祉協議会に協力を求めた。また行政については、所沢市役所こども未来部こども福祉課、所沢保健センターに協力を仰いだ。

3 成果及び今後の展開

・成果と効果；

6月から2月までの9か月間で、相談会を66回実施、利用者は延べ103人であった。ボランティア参加者は延べ43人であった。

この事業を利用した親のアンケート結果はおおむね好評の記述が多かった。またアンケート以外の言語報告においても、「子どもについてのアドバイスが適切」や「子どもだけでなく、親子ともに受け入れてくれる」「自分のことについての話を聞いてもらえる」「話を聞いてもらって安心した」「このような雰囲気は良かった」などの評価が得られた。

子どもたちにとって祖父母の年齢のボランティアと一緒に過ごすことは、何となく安心できるものだったらしく、問題行動が激しい子どももボランティアへの配慮をしながら過ごすことができたと思われる。

一方で「心理士との2人での相談が良かった」「ボランティアの子どもへの対応がずれていた」などの反応も見られ、保護者が切実に問題の解決を求めている姿も見られた

また、ボランティア参加者からは、「毎日が自分にとっての勉強」「こんなに大変な人たちがいるんだ」「自分は何かアドバイスしたいけれど、温かな雰囲気で接することが大切だとわかった」などと報告があった。

・事業を行うことにより見えてきた新たな課題；

今回相談活動を行って見えてきたのは、地域における専門相談のニーズが高いことであった。そのため、今回の事業の中では接食、発音指導を専門とする言語聴覚士の相談の機会を設けた。

今回の事業は、発達障がい親子が“明るく楽しく”なってもらえるようにと考え、ボランティアを交えての相談会を想定していたが、実際には通常の対応では難しい我が子への接し方を教えてもらいたいという切実な相談が大半であった。

子どもが学校でいじめを受けている、親自身が子どもの頃に家庭的な問題を抱えていた、子どもが暴れるために子育てに疲れているなど、医療機関や教育・保健機関では相談しにくい内容を相談される方が多かった。

そのため、ボランティアと相談員が対応するには限界があり、心理士や言語聴覚士が主となって対応法を検討しつつ、ボランティアや相談員と協力しながらその場の雰囲気が温かな母子を支えるものとなるように尽力する必要があった。

この相談会においては、“発達障がいの子どもの持っている”『先輩ママたち』が、受容的に話を聞きながら接してくれるなど、地域でのつながりを持つことの大切さを伝えてくれたと思われる。

このように今回の事業は、地域の様々な人たちと発達障がいの親子がわかりあうための良いきっかけとなったのではないかと思われた。

この活動を持続的に行うため、当法人では昨年12月より福祉サービスである障害児通支援事業を行うことにしたが、“親だけが相談を受ける”ことや、“親自身の話を聞く”ことはこの公的サービスの対象外であるために、今後も無償の自主活動として、親自身がまた親子が安心して地域で生活することができるよう、専門と地域の力を結集させながら相談活動を実施していくことを考えている。